

〈資料紹介〉

『東京週報』掲載 坂口安吾・矢田津世子関連資料三点

大 原 祐 治

矢田津世子「ぶろむなあと」片手落ちな結婚政策二つ（『東京週報』第一八号、一九三三年六月一日一七面）

優良なる民族をつくるには結婚の指導改善に俟つより外はないと日本民族衛生学会主唱で日本に初めての結婚相談所を開設する事になったそうで、この相談所は東京・大阪・名古屋の三ヶ所に設ける予定で東京大阪は民族会が主宰し、名古屋は県警察部で管理し来る十七日日比谷公会堂でその発会式を挙げ、同廿日から日本橋白木屋に事務所を置いて一般の相談に応ずるといふことに決定したそうです。が、優生結婚の是非を云々されてゐる現今、この計画もまた相当世評にのぼることと思ひます〔。〕

優れた智能と壮健な肉体をもつてゐる男女の結合は、よ

き民族をのこす上に於て必要なことにはちがひないのですが、では、一方、不良な智能と虚弱な肉体の持主である男や女の問題はどうなるのでせう。かういふ計画の生れる度に感じるのですが、片手落ちといふことです。優良なる民族をつくるための相談所を設けるといふ以上は、その民族の母胎について、より深い研究と考察が必要だと存じます。たとへば、優生結婚の資格者の指導と同時に、その無資格者の指導、むしろ、無資格者をして資格者たらしめるための相談こそ、当を得たものと思はれます。

△

六月三日（夕刊）の東京朝日は、その社会面のトップに「奨励金付で結婚強要」の記事をか、げてゐます。見出しの奇抜なのに興味をそ、られて読んでみると、これはドイ

ツではなしで、こんどドイツ政府の閣議を通過した予算十億マルクといふ大規模の失業撲滅法の内容の一つとして結婚奨励貸付金の計画が発表されたのです。

ところが、この貸付をうける資格として新婦は少くとも六ヶ月間何らかの労働に従事してゐたものなる事を必要とし、又一方新郎が月額百二十五マルク以上の収入を得る限り決して共かせぎをせざる義務を負ふといふのです。これは、政府苦心の名案だそうで、最近経済的に窮乏して結婚が困難なため婦人労働者が多く男女が別々に労働に従事して二重に職場をふさぐ事となるので、婦人を男子に寄生させて失業の減少を計らうといふ考へなのです。

一見妥当にみえるこの新計画に就いて考へをめぐらせてみますと、こゝに大きな錯誤のあることに気づかせられます。たとへば、月収百二十五マルク以上の新郎が十五万人ゐて一年間に十五万組の夫婦が出来たと仮定してみますと十五万の労働婦人の席が空いてそこへ十五万人の失業者が腰をかけるといふことになります。ところが、救はれた十五万人の失業者がそこに落ちついて生活の安定を得たとしなほ、翌年に、また十五万組の夫婦が出来て十五万人の失業者が救はれるとしても、失業者の数はそれによつて、はたして真実減少するでせうか。一本の虫歯を抜いてもなほ次の歯が蝕んでゐるといふやうな生理状態で説明す

ると、これは抜いてもく抜き足りない虫歯の数で、結局、人体に於けるカルシウムの欠乏といふ事にその原因をみとめねばならないでせう。

矢田津世子「『ぶろむなあと』有産職業婦人の問題」(『東京週報』第一九号、一九三三年六月一八日第一八面)

六月七日(水)の東京朝日は、歌の伯爵吉井勇氏の朗かな家庭解消問題を詳細に報道してゐますがそれによりますと、吉井氏と徳子夫人は合意の上法律上の籍はそのまゝにして実質的に離婚、家庭を解消して、吉井氏は一子滋君を守り育て、徳子夫人は自由の身となつて職業戦線に出てゆくといふやうな一家風ある結婚解消を行つたさうです。吉井氏夫妻の、このやうな家庭破綻の重なる原因は夫君が酒を愛し性来抜けきらない放浪癖を続けてゐることが家庭生活に調和せずまた一方徳子夫人の家庭をないがしろにした外出生活の享樂ぶりに夫君が賛成しないといった工合に、とかく性格の不調和が二人の別居生活を強ひるやうになつたといふのですが、今後吉井氏は、草深い南林間都市にひき籠つて専ら令息相手の家庭生活を開始し、また夫人の方は職をみつけ次第、父君柳原義光伯の許しを得て多少の補助をうける以外は、手芸土佐織と婦人記者で経済的独立を

してアパート住まひを始めるとのけなげな決心をしたさうです。

徳子夫人の場合のみをとりあげてみて、この度の行動は、「伯爵」といふ一つの權威ある肩書に対する敢然たる反抗ともみられ、同時に、十年このかた夫君吉井氏に寄生生活をしてゐた妻としての自分を省みた夫人が、その生活を批判し、そこから抜け出して人間としてまた経済的能力を持ち得た女としての出発ともみられるのですが、私たちの夫人にかけたこの期待は、記者に語つた夫人自身の言葉によつて饒へさねばならないかと思はれます。

「人里離れた林間都市にひつこむやうになつてから、私はそんな隠遁的な生活は嫌なのでもとの住居の麹町に別居してゐたが思ひなほしてまた一緒に住んでみた——中略——私もこだはらない自由な気持で別れる。柳原の父「は」家に帰れと切にいつてくれますが、私には再婚の意思もなし、生活の気分転換を求めて職業婦人として立ちたいのです——」

これが夫人の偽らない心であるらしいのですが、これによつて察すると、夫人の職業意識といふのは実に単純なたあいのないものだと思います。夫人の職業戦線にのり出すその心意気は単に「夫君吉井氏との隠遁的な生活から逃避する」ためであり、且つ「再婚の意思もないのに実家に帰

つてしまつてもつまらないから一人で勝手気儘なアパート生活を始め、これまでの生活の気分転換を求めて職業婦人として立ちたい」といふ意味に解釈してもさしつかへないでせう。

生活の必然的要求として僅か十数人のデパート売子採用試験に数百人の娘子軍の押し寄せてくる現今、伯爵夫人徳子氏の気分本位な職業戦線への進出はその動機が動機なだけまつたく苦笑もので決して好意のもてた話ではありません。】

つい先達、私の知人のある物産会社専務令嬢は、学校を出て家にぶらぶらして、もつまらないからとの理由でその物産会社のタイピストになりましたが、四、五日するともう倦きがきて、こんどは女流飛行家になる大望をおこし、あつさりと社をやめてしまつたのですが、結局有産婦人の求めてゐる職業といふのは、彼女らのダンスやゴルフや人形と同じく一つの趣味としか思はれません。

坂口安吾「ジャン・デボルド 若園清太郎訳 悲劇役者」
〔『東京週報』第二七号、一九三三年八月一三日二二面〕

☆

大戦後の仏蘭西には未だ見るべき文学に乏しい。アンドレ・ジツドがある。マルセル・ブルウストがある。併し此の二

人も正しくは大戦前期の作家とすべきであつて、ジツドはドストエフスキーのアレゴリイであり、ブルウストは戦禍に崩壊した王朝期的生活の白鳥の唄を誦した人と見るべきであらう。』

未曾有の戦禍は人々の生活から批判とか反省といふ「思想的遊戯」を奪ひ去らうとした。全欧羅巴の生活は単に衝動に基いて最も無批判的に動き出した。前時代への、而して規約への最も軽卒な復讐。ところで、人間の理窟ぐらいたわいないものも尠いのだ。無批判的な行動に踏み荒されたが最後人々はどこへ批判の根を下していいか分りやしなくなる。こましくくれた束縛を失つたら、我々の精神生活では黒を白にすることも容易である。偶像を破壊するのは最も唐突な気まぐれな決意一つで充分なのだ。子供の世界が大人の世界になる。大人が子供に、女が男に、男が女に。

ところで、時代の凡ゆる生活がこう軽率に、無批判的に妄動しだしたとする、総ての基調がさうあつてみれば、この浅薄さが実は此の時代に最も深刻な動きであると言ふことも出来るではないか。斯ういふ逆説も、とりとめない我々の生活では真実となりうる。

ジャン・デボルドは此の逆説的な不安期の生んだ代表的

な作家である。彼及び彼と同派のジャン・コクトオ、レエモン・ラディゲらが如何に多くの逆説を生活してゐるか。しかもその逆説が如何ともなしがたい宿命的な真実に於て為されてゐるのだ。ここには批判の形に於ける批判はない。凡ては生のままの感情となり、血液はその血液のまま流されてゐる。斯ういふ作品をどう批判していいのだらう？

我々は生々しい血液を見て、これは生々しい血液であると判断する外に仕方がない。同様に「悲劇役者」のやうな作品は、これはこれで真実の書だといふほかに方法がないだらう。ところで、これは贗の血液でないといふことは、かりそめにも個人が決して二人の個人となり得ないことに似た「」世に至難な業と言はねばならぬ。

だが、この作品には、さらに重大な新らしい文学への暗示がある。「」簡潔さ。単に文章としての簡潔さなら意味はない。フランスの文章法ではボアロオの昔からサムプリシテを金科玉條としてゐる。

物の取扱ひへの本質的な簡潔。而して、百の複雑も直接のみに還元することができ、のみならず直接の一のみが百の複雑に勝る激しい真であること。デボルドが、コクトオが、この逆説に成功した「」。

これは文学史的に見て、複雑（プルウスト）に対する反逆のもたらした成功の如く見られてゐるが、私はさう思はない。この混沌とした妄動的な不安期にして初めて有りうる必然であつて、批判を失つた錯雜極まる百の行動を解くには唯一直接の確信を掴み出すほかに方法がないのだ。これは学ぶべき方法である。

とにかく此の作品は、人生の取扱ひが方法的に、従つて本質的に他の時代の文学と異つてゐる。こういう作品を訳すには、同じ時代にすみ、同じ方法によつて人生を見凝めながら生育した人でなければ、その心を訳すことはできない。若園君は此の仕事に最もふさわしい人であつたと思ふ。

私は此の作品に近代文学の完成を認めることはできないが、大戦後の我々青年たちの出発として、必ず通らねばならぬ門であることを——単に空虚な新形式としてではなく、人生の取扱ひへの本質的な新様式をもたらした貴重な案内書として——この良書を若き好学の士におすすめた

い。

（東京市神田区今川小路一丁目、金星堂発行、定価金一円）

旧字を新字に改め、仮名遣いは原文のままとした。

本文のルビは省略し、誤記あるいは脱字と思われる箇所については「」で表現を整えた。

【解題】

一九三三年に創刊された『東京週報』という週刊新聞の存在は、従来あまり知られていなかったが、坂口安吾に関心を持つ人々の間では認知されていた。それは、安吾が一時期思いを寄せた作家・矢田津世子に宛てた書簡の中で言及されていたからである。

その書簡で安吾は、『東京週報』の編集部にいる友人に矢田を紹介したので、銀座にあるというその編集部に同行してほしい、と記している。その内容は、以下の通りである。

僕の友人に、東京週報といふ、近頃出来たばかりの週報に関係してゐるのがゐて、貴方にお目にかかつてお願ひしたいことがあると言つてゐるのですが、もし、銀座へ御出向きのことがありましたら（但し昼）僕へ電話でもかけて下さいませんか。「…」但し木曜日は、友人は在社しないさうです。御都合のいい日、宜しくおねがひいたします。

一九三三年五月二三日付 矢田津世子宛書簡

『東京週報』に「関係してゐる」というその「友人」とは、安吾がかつて在籍した語学学校アテネ・フランスの同級生だった大久保洋^{ひろ}という人物である。後年、ルナル『にんじん』やラクロ『危険な関係』といったフランス文学の翻訳家として知られることになる大久保は、本人の回想^①によれば、慶應義塾大学予科に進学した際、第二外国語として履修したフランス語の補習のためにアテネ・フランスに通い、そこで安吾と知り合ったという。安吾らアテネ・フランスの同級生が創刊した同人誌『青い馬』にも、大久保の名は同人の一人として記されている（ただし、作品の発表はなかった）。

『青い馬』に発表した小説「風博士」が注目を集め、安吾が文壇における新人作家として認知され始めた頃、大久保の方は慶応の同級生だった伊藤岱吉^{たいきち}（のちに慶應義塾大学経済学部教授となる）の誘いを受けて、『東京週報』の編集に関与するようになったという^②。大久保の回想によれば、『東京週報』は元『国民新聞』社長で新聞界の重鎮だった伊達源一郎が発足させたものだというが、この説明は次のような斎藤昌三の記述からも裏づけられる。

「東京週報」ウイクリーとして見るべきものが日本には未だない。「週刊朝日」「サンデー毎日」みな読みもの本位で、冷静に公平に一週間のニュースをまとめて発表するものはなかった。この欠を補ふべく唯一の「東京週報」が伊達源一郎主幹のもとに、去る二月から遅速なく出てゐるが、宣伝が足らぬのか余り知られてゐないのは惜しい。日刊新聞も必要であるが、保存上本紙も亦愛読の好適紙であると思ふ。

少雨莊主人「斎藤昌三」「特殊本紹介」（『書物展望』一九三三年五月）

「冷静に公平に一週間のニュースをまとめて発表する」週刊新聞としての『東京週報』は、「読みもの本位」の『週刊朝日』『サンデー毎日』といった新聞社系週刊雑誌とは異なる、と斎藤は論じているが、これらの週刊雑誌（前者は二〇二三年五月に休刊、後者は今日なお刊行が続いている）も、創刊当初はタブロイド判で刊行されていたことから考えれば、両者の差異（週刊雑誌／週刊新聞の差異）はそれほど大きくはなかったのかもしれない。これらの週刊メディアの刊行・流通形態については別途改めて考える必要があるかもしれないが、少なくとも一九三三年当時において、これらのメディアが一括りの存在として認識されて

いたことの実例として、ここでは以下の言説を挙げておく。

軽量廉価雑誌なら週刊朝日、サンデー毎日（十二銭）、
ドルメン、何を読むべきか（十五銭）、よみの（五銭）、
アサヒグラフ、東京週報（十銭）等も包括出来るが、
中心、標準は十銭といふ相場であらう。拾へばまだま
だあるが、目ぼしい所はまづ逃さなかつたつもり。純
文学雑誌の簇出せんとする此の秋に十銭ジャーナルの
進出は好個の対照をなさう。（三三、九、二）

水上淡三「流行十銭雑誌展望」（『書物展望』
一九三三年一〇月）

ここで確認しておきたいのは、斎藤も注目していた「冷
静に公平に一週間のニュースをまとめて発表する」という
『東京週報』の性格である。

こうした性質を持つメディアについては、当時における
新聞研究関連の文献の中で「フィチュア・ストーリー」な
いし「カーレントヒストリー」と呼ばれており、以下に示
すように、『東京週報』はそうしたメディアの代表的事例
として言及されている。

フィチュア（読物ニュース又は読物記事）は、最も

興味ある最近のニュース、又は、その日のニュースと
は直接関係なきも、比較的強く時間性を持つ話題トピックの詳
細なる報告である。〔…〕

フィチュアはニュースを基とする所謂読物であるか
ら、瞬間的な、ぶつきら棒な、冷淡なニュースを満載
する新聞紙を賑はすために、近代極めて重視されるに
至り、何れの新聞紙も利用せぬものはない有様である。
而して、フィチュアの魅力は、独立してフィチュア専
門の週刊雑誌を簇出せしむるに至つた。我国に於ける、
サンデー毎日、週刊朝日、東京週報はフィチュアを以
つて読者に問ふ週刊雑誌であつて、彼等が何れも盛大
に存立してゐるのを見れば、フィチュアの価値もまた
大なりと云ふべきである。

関一雄『新聞ニュースの研究』（一九三三年一〇月、
厚生閣）

国民新聞社の経営意の如くならず社長を棒に振つた
伊達源一郎君が、東京週報を今度は間違なく五日から
発行するとの事である。二十四頁のタブロイド、各日
曜発行月四回四十銭との事であるが恐らく大失敗を来
す事であらう。同誌の目標は、前週中に起つた出来事
を纏めて発表する点でカーレントヒストリーである。

故に、朝日新聞等が縮刷版を発行する代りに編纂すれば理想的であらうが、十把一束的のルンペン記者を招集したのでは、反つて原文を取毀す位が落である。[…](八、二、三)

愚鰯生「式正次」『新聞活殺剣』(一九三六年一月、精華書房)

この新聞が果たして「大失敗」に終わったのかどうか、という帰結については後段で改めて確認することとし、まずは実際の紙面において、『東京週報』創刊の趣意がどのように説明されていたのか、確認しておきたい。

創刊号に見られるのは、以下のような華々しい宣言だった。

「東京週報」は、公正なる言論機関たらんとして生れ出でた。

[…]

今や、ニュースの電波は、空気の如く、文明の社会に満ちて居る。日刊新聞のニュース報道は、殆ど完全に近い程発達して居る。ラヂオも、日々幾回となく、声高くニュースの音波を響かせて居る。此の混乱せるニュースの千波万波の中に立つて、静観し、正視し、主

要なるニュースを組織立て、筋立て、世間の動きの真相を報道せんとするが、「東京週報」の使命である。

[…]

「東京週報」は、政治新聞でもなく、外交新聞でもなく、また経済新聞でもない。世相のあらゆる重要問題を捉へて、其の真相を報道せんとするものである。其の力むる所、真実の報道にあるが故に、かの悪罵を専門とし、好んで人身攻撃をなすが如き、下品なる刊行物と其類を同じうするものでは断じてない。上品にして朗かに、正しく且つ強からんとするのが、「東京週報」の期する所である。

「東京週報」は雑誌ではない、新聞である。新聞の正道を進まんとするが、其志である。その志を行はんが為めに現出したもので、たゞの商品として生れたものではない。[…]

「発刊の言葉」(『東京週報』第一号、一九三三年二月五日)

創刊当初の紙面において、とりわけこうした趣意を反映した記事を担っていたのは、直木三十五と徳川夢声の二人である。直木は「社会展望」および「反射塔」と題した連載、徳川は「優猛話前週」と題した連載をそれぞれ担い、

前週のあいだに日刊新聞各紙が報じた記事を取り上げつつ、軽妙で時に毒の効いた調子で社会時評を展開していた。

なお、創刊当初の紙面においては、徳川、直木以外の文学者も多く起用されたが、大衆文学畑の書き手が目立つ点に特徴がある。創刊時の連載小説は「春宵おぼろ男」と題した吉川英治の小説（ただし、創刊号には原稿が間に合わず、お詫びを兼ねた予告のみが掲載される）であり、他にも久野豊彦（創刊号）、辰野九紫（第四号）、横溝正史（第五号）といった雑誌『新青年』に関係の深い作家たちが、読み切り短編小説の書き手として続けざまに起用されていた。吉川の連載小説は第四号で休載となり、そのまま打ち切られてしまったが、その穴は田中貢太郎の連載小説「黒潮」（第五号〈第一三三号〉）によって埋められた。

もっとも、創刊当初のこうした傾向は、直木三十五の連載が第六号（三月一二日）、徳川夢声の連載が第七号（三月一九日）をもって途絶する前後に早くも転機を迎える。そして、おそらくこのタイミングで文芸関係の寄稿者について調整を担当したのが、安吾の友人だった大久保洋である。先に参照した回想^③で大久保が記すところによれば、自分が文芸関係記事の編集を任されたのは、「坂口安吾をはじめ、アテネ（引用者注、アテネフランセのこと）の仲間の案内で当時名前の出かった若い作家などに連絡がつきやす

い」ことを買われたからだという。

以上のような経緯で大久保は安吾に声をかけたのであり、その結果として安吾から矢田に書き送られたのが、冒頭に引用した一九三三年五月二三日付の矢田宛書簡だった。

七北数人が詳細に跡づけているように^④、安吾と矢田は一九三二年末から三三年一月半ばにかけての時期に加藤英倫の紹介で京橋にあったバー「ウキンザア」で出会い、にわかに関係を深めていった（同年譜で七北も記すように、一九三三年に安吾が矢田に宛てて書き送った書簡は三一通に及ぶ）。矢田が安吾を誘う形で、二人はこの年の五月に創刊された雑誌『桜』（当時注目を集めつつあった新進作家たちが同人として名を連ねた）に参加しており、安吾が『東京週報』に関する書簡を送ったのは、この時期に当たる。さらに、続く五月二八日付の矢田宛書簡で安吾は次のように記している。

東京週報の件、いろいろ御多忙中ほんとに相済みぬことですが、では火曜日の午後、その社へお訪ね下さいませんか。

僕も一緒の方がいいと思はれますので、火曜の午後一時半頃でもカーニバルへ一度いらして下さいませ

んか。遅れてもかまひません。僕一時半に行つてゐます。

東京週報の友人といふのは大久保海^マ洋といふ昔は仏文学専攻の人で、やはり「青い馬」の同人です。春陽堂の十銭文庫にジッドを訳してゐる（引用者注、世界名作文庫二三『繋がれ損つたプロメテ』一九三二年九月、春陽堂を指す）愛すべき紳士です。

東京週報といふのは、できたばかりの、まだつまらないものですけど、それに、原稿料なども、他の大雑誌のやうな、立派なことはできないやうですけど、とにかく、一度、大久保にあつてみて下さい。お頼みいたします。

この週報は、僕もフリーランサアのやうな形で、智慧を絞ることになつてゐるのですが、いい智慧ができません。但し桜（引用者注、安吾と矢田が参加していた前述の同人雑誌）の宣伝だけは、毎号この紙上でやるつもりです。

「僕もフリーランサアのやうな形で、智慧を絞ることになつてゐる」とあるのは、先に参照した回想文の中で大久保が、「坂口安吾をはじめ、アテネの仲間の案内で当時名前の出かかった若い作家などに連絡がつきやすい」ことを

理由に文芸欄を担当することになったと記していたことと符合する。大久保に相談を持ちかけられた安吾は、執筆を依頼する候補の一人として、関係を深めつつあつた矢田の名前を挙げ、両者を引き合わせたのである。

興味深いのは、安吾の仲介で実現した矢田の寄稿が小説ではなく、二回にわたる社会時評であり、掲載されたのも文芸欄ではなく婦人欄だったことである。矢田に対して安吾が、「僕もフリーランサアのやうな形で、智慧を絞ることになつてゐるのですが、いい智慧ができません」と書き送つていたことから想像するならば、両者あるいは大久保を交えた三者のあいだで、新進女性作家による社会時評という企画がにわかに浮上したことが考えられる（彼らの念頭にあつたのは、前述のように創刊当初の『東京週報』紙上で直木三十五や徳川夢声らが連載していた社会時評だったかもしれない）。

一週目（六月一日）の記事は、「結婚」問題に関する社会動向を二つ取り上げ、批判を展開するものである。

一つ目の話題は、結婚相談所に関するものである。矢田は具体的なニュースソースを示していないが、この年、結婚相談所に関する話題は新聞紙面にたびたび登場していた。すなわち、東京市が四月一日に茅場町で開設した相談所と、日本民族衛生学会が六月に日本橋白木屋百貨店内に

開設することが告知されていた私設相談所であるが、矢田が注目するのは後者である。矢田は、「優生結婚の是非」が話題となつている昨今、こうした試みは「相当世評にのぼる」だろうとした上で、優生学的な発想からは取りこぼされてしまう「不良な智能と虚弱な肉体の持主」と見なされる存在への支援こそが必要ではないか、という批判を展開している。なお、矢田は東京以外に大阪および名古屋でも同様の相談所が設けられる予定であるとしているが、当時の新聞で確認する限り、東京以外で同様の相談所が設置されたことを伝える記事は見られない。

二つ目の話題は、『東京朝日新聞』六月三日夕刊で報じられたドイツ政府による結婚奨励貸付金計画である。「奨励金付で結婚強要」といういささかショッキングな見出しが置かれた当該記事が報じるころによれば、ドイツ政府は「新たに結婚するものに對して、家具、台所道具等調達するため生活必需品購入証券の形で一千マルクまでの無利子貸付」を行うというのだが、矢田が批判的に捉えているのは「新郎が月額百二十五マルク以上の収入を得る限り決して共かせぎをせざる義務を負ふ」とするドイツ政府の方針である。「共かせぎ」、すなわち、新たに妻となつた女性の労働を制限し、「一年間に十五万人の労働婦人の席が空」いたとしても、こうした場当たりの対策だけでは失業問

題の抜本的な解決にはならないとする矢田の批判的思考は、前述の「優生結婚」問題の場合と同様に、社会構造そのものに向かうものとなっている。

続く二週目（六月一八日）の記事では、伯爵にして歌人の吉井勇が妻と同意の上で、「法律上の事はそのまゝ、にして實質的に離婚、家庭を解消し」たことを報じる『東京朝日新聞』六月七日の報道を取り上げている。一週目と同様に「結婚」を取り上げているが、婚姻関係の解消を扱うこちらは、結婚「支援」に関する内容を扱った一週目の記事とは表裏の関係にあるとも言える。

前半で矢田は『東京朝日』記事の内容を丁寧に紹介しつつ徳子夫人の行動を「伯爵」といふ一ツの權威ある肩書に對する敢然たる反抗」と受け止めた上で、夫に「寄生生活をしてゐた妻としての自分を省みた夫人が、その生活を批判し、そこから抜け出して人間としてまた経済的能力を持ち得た女としての出発ともみられる」とし、肯定的な評價を示そうとしている。この態度は、前週記事の後半で、ドイツ政府の失業対策が既婚女性の労働を制限しようとするものであったことを批判していたこととも連続するもので、女性の経済的自立を推奨するものである。

しかし、そうであればこそ矢田は後半において、「伯爵夫人徳子氏の気分本位な職業戦線への進出」には否定的な

考えを示している。それは、職を求めようとする徳子夫人の動機が「生活の気分転換」のためという「たあいのない」ものでしかなく、ひとりの女性が経済的自立を求めるといふ真剣さに欠けるものだからである。

付言すると、矢田が二週にわたる社会時評を掲載した一九三三年前半は、メディアにおいて「結婚」をめぐる問題がくり返し取り上げられており、矢田が取り上げた結婚相談所開設の問題や、吉井勇夫妻の結婚関係解消をめぐる報道に先だって、いわゆる「結婚解消」問題が世間の注目を集めていた。これは、京大医学部外科部長・鳥潟隆三博士の娘が父の教え子と結婚したものの、新郎が性病を患っていたことが判明したために結婚の解消を告げる文書を各方面に発したというものであり、この出来事をきっかけに、雑誌や新聞では結婚と離婚に関して活発な議論が惹起された。その意味で、矢田の時評は時宜にかなったものであり、『東京週報』に矢田を紹介した安吾は、六月一七日付の矢田宛書簡で「東京週報の社会時評は愛読してゐます。あれだけでも、あの雑誌は、ずい分良さを増したやうに思はれます」と記している。

*

*

*

ジャン・デボルド（若園清太郎訳）『悲劇役者』に関する書評（八月一三日）は、坂口安吾が『東京週報』に寄稿したものとしては、小説「盗まれた百万円」⁹（二〇月一五日）に先立つ最初のものであり、従来、全集等に収録されたことのない新発見資料である。

デボルド『悲劇役者』の若園による翻訳はもともと、安吾や若園らアテネ・フランセの同級生らによって刊行されていた同人雑誌『青い馬』に掲載されていた。ただし、全一二章のうち第一〇章までの部分が同誌第二号（一九三一年六月）、第三号（同七月）、第四号（同九月）に掲載された後、同誌の最終号に当たる第五号（一九三二年三月）には末尾部分の第一章、第二章が掲載されなかった。第四号の「編輯後記」で「若園君の翻訳『悲劇役者』は全訳完成したのですが、頁の都合であと一二回に分載します」と記されていたことと食い違っているが、このことについて第五号の「編輯後記」には、「若園清太郎君の翻訳『悲劇役者』は、全部「新女学研究」に載つたため、中止しました」という断り書きが見られる。これは、『新文学研究』第五輯（一九三二年二月、金星堂）に翻訳の全文が掲載されたことを指す。その後さらに、単行本が一九三三年七月に金星堂から刊行されることとなったわけだが、安吾の書評はこの単行本に対して書かれたものである。

デボルド（一九〇六—一九四四）は、一時、「恋人」としてジャン・コクトーと親密な関係を結んでいたことでも知られるフランスの作家・詩人であり、『悲劇役者』の原著 *LES TRAGÉDIENS* は、一九三一年にグラッセ社から刊行されている。若園による翻訳の初出が一九三一年六月刊の『青い馬』第二号からであったことを考えると、若園は刊行直後に原著を入手し、すぐさま翻訳を始めていたことになる。若園はアテネ・フランセにおいてジョゼフ・コット校長の秘書役を務める傍ら図書館の仕事も手伝っており、そこでは「教科書の販売と、生徒たちのフランス原書の購入申し込みに従って直接フランスの出版販売会社へ注文して取り寄せる業務も行なっていた」ということなので、ほぼ時差なしにフランスの出版事情をフォローできていたのだろう。若園の訳業における同時代性については、安吾も書評の中で次のように言及していた。

とにかく此の作品は、人生の取扱ひが方法的に、従つて本質的に他の時代の文学と異つてゐる。こういう作品を訳すには、同じ時代にすみ、同じ方法によつて人生を見凝めながら生育した人でなければ、その心を訳すことはできない。若園君は此の仕事に最もふさわしい人であつたと思ふ。

なお、この時期の若園は、金杉惇郎・長岡輝子夫妻の主宰する劇団テアトル・コメディの機関誌『テアトル・コメディ』でもジャン・サルマンの戯曲「大陸」の翻訳に取り組んでおり（第一巻第一号「一九三三年二月」～六号「同一二月」）、翻訳家として精力的に活動を展開していた。

デボルド『悲劇役者』は、母と息子をめぐる物語である。ごく幼かった頃、息子は母が夜に家を抜け出すことがあるのに気づき、密かに後をつける。またあるとき母は、父に内緒で幼い息子を連れてバリの街へ出かけたこともある。そんなある日、怪しげな行動をとる母の浮気を疑って父が激昂し、取り出した銃を誤って落としたために暴発させてしまう。息子はこの場面を目撃してしまい、衝撃を受ける。やがて父が病死し、息子は中学校に進学する。学校にうまくなじめない息子は、幼い頃に目撃した父母の修羅場について旧友たちに触れ回って周囲の関心を引こうとするが、そのことが教師にばれて叱責される。結局、学校になじめないまま、母によって家につれ戻された息子はその後、大々的な家畜の飼育を思い立ち、母に出資させる。姉の不興を買いながら始めた事業は、やがて悪臭問題によって近隣から抗議されるところとなり、最後には放火されてしまうこととなった。

地所を失ったのち、母と息子はバリの街で同居を始める。

母子密着ともいふべき状態で生活する中で、息子は母親から離れようとするが、その試みが完遂されることはない。

安吾は書評の中で、(第一次)世界大戦後のヨーロッパが「衝動」的で「無批判的」な「浅薄さ」を見せているとすれば、そのような「浅薄さ」こそが逆説的に「最も深刻な動き」ではないか、としたうえで、こうした動向を体現する文学者として、コクトーやラディゲと並べてデボルドを評価している。

さらに安吾は『悲劇役者』という作品の特徴として、ブルースト的「複雑」の対極にあるような「簡潔さ」を挙げている。ここで想起されるのは、安吾がかつて訳出したエリック・サティ論の中でコクトーが重視していたのもまた、サティの音楽における「簡潔さ」だった、という符合である。⁽¹⁵⁾

なお、本書の出版記念会について若園は後年、次のように回想している。

たしか東銀座の「末広」だったかと思うのですが、それが大変荒れましてね——。皆が酒を呑みかわしているうちに、滅茶苦茶になりましたね。安吾が江口(引用者注、『青い馬』同人だった江口清)と喧嘩したり、また安吾が三笠書房の竹内道之助と取っ組み合い始めそう

になったり、中也(引用者注、雑誌『紀元』で若園や安吾と共に同人として名を連ねた中原中也)がまた酔っ払って盛んに暴れ廻ったりね、どうにもならないでしょ。滅茶苦茶になつてね、結局それで私自身が大声出して、「まことに皆さん、今日は私の出版記念会でございますので、喧嘩はやめていただきたい。もし喧嘩をされるなら、この席が終つてからにしてください」と、大声で言つたような気がするんですけどね。⁽¹⁶⁾

*

*

*

矢田の社会時評や安吾による書評が掲載された時期以降の動向も含め、『東京週報』について、以下に補足しておく。すでに確認したように、創刊当初の勢いが弱まりを見せたタイミングで『東京週報』の編集に参画した大久保洋は、かつて通った語学学校アテネ・フランセで構築した人脈を頼りに、新進作家・坂口安吾とその周辺の文学者たちを紙面に引き込んでいった。矢田津世子の登用はその一つであり、安吾にとって文壇デビューの恩人とも言うべき牧野信一⁽¹⁷⁾や、牧野が主宰した雑誌『文科』に安吾と共に加わっていた井伏鱒二⁽¹⁸⁾なども相前後して短編小説を寄稿している。すでに言及したように、安吾自身もまた、本稿で紹介した

書評の二カ月後には短編小説「盗まれた百万円」を寄稿する。

ただし、こうした文学者たちの関与はいずれも単発的なもののばかりで、継続的なものにならなかったのも事実である。「東京週報」は雑誌ではない、新聞である」（『発刊の言葉』）という創刊当初の宣言に照らせば、名の通った書き手による署名記事（読みもの）が減っていくのは、望ましい紙面のあり方に近づいていったと見なすこともできるが、創刊当初の勢いにいささか翳りが見え始めた感はない。

一方、文芸関係以外に目を転じれば、紙面構成上、創刊当初から大きな位置を占めていたのはスポーツ関連記事であり、とりわけ注力されていたのは大学野球関係の記事である。その中核を担ったのは、明治期以来、野球報道の先駆者として知られ、雑誌『運動界』の編集主幹も務めた太田四州^{ししゅう}であった。第三一号（九月一〇日）および第三二号（九月一七日）が「リーグ戦特輯」とされ、第三七号が「早慶戦特輯」とされたほか、毎号におけるスポーツ関連記事は太田の署名記事を筆頭に充実している。

スポーツ欄では、競馬関連の記事についても継続的に紙幅が割かれているが、こちらを主に担ったのは、創刊号で「競馬顧問」として顔写真入りで紹介された中沢忠一（競

馬報道で知られる新聞人）である。

また、紙面全体の構成に関しては、創刊以来ずっと第一面に大きな写真があしらわれることも、本紙の特徴と言える。二つ折りのタブロイド判新聞である本紙では、一番外側になる部分（第一、二面および第二三、二四面）は、本文よりも上質の紙が用いられ、とりわけ表紙裏の第二面に關してはグラフ誌のような編集がなされている。最終二面分のスペースは当初、すべて全面広告となっていたが、第一八号（六月一日）以降では第二三面にも写真記事が掲載されている。表紙写真も含め、こうしたデザイン性の高い編集は目を引くところであった。

その他、特に一九三三年後半における紙面においては、女性読者への訴求という点でも特徴が見られる。第一八号（六月一日）および第一九号（六月一八日）で矢田津世子を起用した社会時評の試みがなされていたことについては本稿で紹介したところだが、その後の紙面でも、第二〇号（六月二五日）から「世界の女を語る」と題したシリーズ（途中から「世界の女」に改題）がスタートし、中国、ソ連、フランス、アメリカといった国々の女性たちのようすが断続的に紹介されていた。

他にも、第三三号（九月二四日）以降の紙面では毎月一回、女性誌『主婦之友』最新号の内容を詳しく紹介する記

事が掲載されたほか、第四一号（十一月一九日）以降の紙面では四号にわたって、東京週報社主催のイベントとして「新女性の夕べ」が二月二〇日に日本青年館で開催されることが大々的に告知された（男子入場は絶対にお断り）という注記までなされている）。開催後の報告記事が紙面に掲載されることがなかったため、イベント当日の詳細は不明であるが、本紙の特徴を考える上では留意すべきことかもしれない。

最後に、以上のような特色を示したこの週刊新聞が、いつまで刊行されていたのか、という点について、現時点で把握しうる限りの情報を示しておきたい。

筆者が入手した『東京週報』は、合冊された形で古書として流通していたものであり、その内訳は、第一号（一九三三年二月五日）から始まり第四九号（一九三四年二月一日）で終わる約一年間分であった。ただし、第一四号（一九三六年五月一日）と第四二号（同年一月二六日）は合冊の中に含まれておらず、前者（第一四号）については筆者が別途、単体で古書として入手することができたが、後者（第四二号）については未確認の状態である。この号については従来、木山捷平の小説「赤木先生」が掲載されていたことが知られていたが、筆者が確認したところ、残されているのは小説掲載部分の切り抜きのみで

あり、紙面全体の内容については不明である。

合冊本の最後に収められていた第四九号（一九三四年二月一日）を終刊号と見なしうるかどうかという点については、直前の第四八号（同年一月一日）から一ヶ月ほど間が空いていることに加え、ずっと維持されてきた二四頁立ての構成が唐突に一六頁立てに減じ掲載記事の傾向にも変化が見られること、表紙部分の紙質が明らかに低下し、先に言及したようなグラフ紙めいた巻頭・巻末記事が失われていることなどが、ヒントになりそうである。

『日本新聞年鑑 昭和十年版』（一九三四年一二月、新聞研究所）掲載「新聞年表 自昭和八年九月一日至昭和九年八月末日」で確認すると、二月一日の項に「銀座新聞社長荒木丈太郎君東京週報の経営を引受け復活発刊す」という記述があり、これが前述の第四九号の刊行を指すものと思われる。従って、先に指摘した紙面の変化は、経営体制の変更に伴うものだったことになる。さらに同年表の三月一七日の項には、「東京週報より荒木君手を引き精算事務所設置さる」という記述も見られる。

以上のことから判断すれば、『東京週報』は第四九号をもって終刊となったか、せいぜいその後、数回の刊行を行ったか、といったところであつただろう。直前の第四八号（一月一日）に掲載された「社告」において、創刊一周年を

記念する「記念号」を二月中旬に刊行することが予告されたほか、「大東京年鑑」の編纂や「ミス東京の選出」、さらには本社内に「東京案内所」を設置することまで謳われていたことからすれば、驚くべき頹落ぶりである。先に参照した「恐らく大失敗を来す事であらう」という式正次の予言⁽¹⁸⁾は、見事に的中する形となったといえよう。

注

- (1) 大久保洋「希望の明星 わが三田の青春1 アテネ・フラッセ交遊抄」(『知識』一九八八年一月)
- (2) 大久保洋「希望の明星 わが三田の青春3 「東京週報」奮闘記」(『知識』一九八八年三月)
- (3) 大久保「希望の明星 わが三田の青春3 「東京週報」奮闘記」(注2参照)
- (4) 七北数人「坂口安吾年譜」(『坂口安吾全集』別巻、二〇一二年二月、筑摩書房)
- (5) 相談所運営の中心人物だった加用信憲の回想によれば、日本民族衛生学会の会長だった永井潜(東京帝大教授)の知人に白木屋百貨店の重役を務める人物がおり、店内の一室を無料提供するという申し出があったという。相談所が置かれたのは「四階の片隅みにある物置きのような小部屋」でしかなかったが、新聞や雑誌によって事業

開始前から大きく注目された。もともと、実際に相談者が集まったのは最初の二ヶ月ほどに過ぎなかったとのことである(加用「優生結婚相談所の思い出」、『民族衛生』一九六四年三月)。

- (6) 『読売新聞』一九三三年五月三十一日の記事は、相談所が六月一日に開設される予定であり、それに先だって結婚に関する講演会が開催される予定だと報じているが、矢田は十七日に日比谷公会堂で発会式開催、二〇日より相談所開設と記しており、日付けが一致しない。

- (7) 経緯の詳細については、『読売新聞』一九三三年一月三〇日記事「近代の誤れる結婚観を持つ男性へ抗議の破婚」ほかで報じられた。

- (8) 一例を挙げれば、矢田による社会時評連載に前後する時期には、戸坂潤と田中耕太郎の間の論争が生じている。これは、戸坂が『東京朝日新聞』掲載の「五月の論壇(二)離婚と哲学(下)」(五月四日)において、カトリック主義に基づいて離婚を否定的に論じる田中の文章(「現代婚姻思潮における個人主義と国体主義」、『改造』一九三三年五月)を批判したのを受け、田中が同紙上において戸坂を含む複数の論者に対して四回にわたる反論(「婚姻問題と立場」六月一六―一九日)を展開したものである。

(9) この作品については、解説を付して『新潮』二〇二三年一月号にて紹介した。

(10) 単行本版の本文は『新文学研究』第五輯掲載の本文と体裁が完全に一致しており、紙型が流用されたことをうかがわせる。冒頭にあしらわれた木版画の挿絵も同一である。なお、『新文学研究』巻末の「編輯者の言葉」(伊藤整)には「若園清太郎氏の長期にわたる御労作「悲劇役者」全訳百五十枚を頂戴できた」との記述が見られる。同号には若園と同じく『青い馬』の同人だった江口清によるポール・モーラン「国際連盟の舟歌」の翻訳も掲載された。

(11) ジャン・ジャック・キム、エリザベス・スプリツジ、アンリ・C・ベアール(秋山和夫訳)『評伝ジャン・コクトー』(一九九五年五月、筑摩書房)一六七―一八六頁。

(12) 若園清太郎『わが坂口安吾』(一九七六年六月、昭和出版)八頁。

(13) 坂口安吾「エリック・サティ(コクトオの訳および補註)」(『青い馬』創刊号、一九三一年五月)の末尾近くに次の一節が見られる。「サティの手にしてゐるのは、新しい簡潔さだ。過去の進歩した技巧によつて豊富にされた新しい簡潔さだ。」

(14) 村上護との対談「坂口安吾を語る」(前掲若園『わが坂口安吾』二六四―二六五頁)。

(15) 牧野信一「プランクトンの手紙」(『東京週報』一九三三年六月一日)

(16) 井伏鱒二「小さな町」(『東京週報』一九三三年六月四日)。この小説については、『新潮』(二〇二四年一月)にて解説を付して紹介した。

(17) 第四二号については従来、木山捷平の小説「赤木先生」が掲載されていたことが定金恒次による調査によつて知られていたが(「木山捷平の未発表原稿及び稀少資料」、『倉敷芸術科学大学紀要』二〇二二年三月)、筆者が確認したところ、木山捷平関係資料として岡山県笠岡市立図書館に残されていたのは当該小説掲載部分の切り抜きのみであり、紙面全体の内容については不明である。

(18) 前掲愚鱈生「式正次」『新聞活殺剣』(一九三六年一〇月、精華書房)。

(おおはら ゆうじ・実践女子大学教授)